産業新聞二〇二四年九月二日掲載　掲載許諾済

新社長に聞く

The New President Interview

バスバー生産5倍に拡大

サンコール 奈良 正氏

▽奈良正（なら・ただし）氏＝85年東北大院工学研究科修了、トヨタ自動車入社。米国、ベルギー、タイと海外駐在は合計17年に及ぶ。エンジン開発が長く、ベルギー時代は初代ヤリスの開発に一から携わり、欧州の学会で論文発表も経験。17年サンコール出向、19年取締役常務執行役員、20年代表取締役専務執行役員、22年代表取締役副社長執行役員。休日はジョギングを楽しむ。60年8月31日生まれ、静岡県出身。

自動車部品メーカー大手のサンコールは、金属精密塑性加工技術を核に、自動車関連材料・部品をはじめ、ハードディスク部品やプリンター、光通信機器部品など事業領域を拡大し続けている。6月27日付で新社長に就任した奈良正氏に今後の展望を聞いた。

――就任の抱負から。

「足元の業績を立て直し、閉塞感からの脱却を目指す。トヨタ時代からサンコールとは関わりがあったが、実際に来てから多くの刺激を感じている。自社の技術と他社との連携で新商品開発など可能性を広げ、社員にも前を向こうと伝えた」

――昨年、創業80周年を迎えた。これまで培ってきた会社の強みは。

「塑性加工技術をコア技術に精密機能材料から製品までを一貫生産することが当社の最大の強みだ。創業当時からばね用高級線材を製造し続けている。例えば、自動車のエンジンに使われるバルブスプリングを製造できるのは国内では数社のみ。老舗企業として積み重ねてきた技術と社員のチャレンジ精神で、医療や環境など新たな分野にも挑戦している」

――2025年3月期第1四半期を振り返ると。

「売上高は電子情報通信分野でハードディスク（HDD）用サスペンションや光通信用製品の需要が回復基調にあることなどから増収となった。利益面はHDD用サスペンションの新機種増産対応に関する費用や訴訟対応費用などの影響により赤字。EV関連製品はLED関連が増えた一方、バスバーやモーターコアが減少した。電子情報通信分野は、データセンター向けのHDD用サスペンションや光通信製品が大幅に増加した。プリンター関連もコロナ禍が明け、持ち直している。既存自動車分野は、自動車生産が回復傾向にあるものの認証不正問題の影響が残り、特に国内向けが停滞している」

――今期で3カ年中期経営計画「GGP24」が最終年を迎える。今後の見通しは。

「光通信用コネクター・アダプターの需要増加に期待が高い。中国・深圳の工場は現在フル稼働で、生産能力強化を検討している。データセンター向けをはじめ家庭用電話向けなど、今後数年は伸びるとみている。EV関連は投資を先行しており、来年以降、大型案件の受注で大きく伸びるだろう。次期中計ではEV関連に重きを置き、バスバーをはじめ、銅やアルミといった線材製品の製造を強化していく。また、21年に出資を受けた伊藤忠丸紅鉄鋼のネットワークを活用させていただいており、今後さらに関係を深めていきたい」

――バスバーの生産体制を強化している。

「25年度にかけて生産能力を約5倍に拡大し、約17億円の投資を進める。現在の主力拠点である広瀬工場（愛知県豊田市）に新工場を建設し、年内の稼働を予定している。子会社のサンコール菊池（本社＝熊本県菊池市、力月浩社長）では設備を増強し、国内でバスバーの2拠点生産体制を構築する。さらに米国子会社のサンコールアメリカ（インディアナ州）でも来年、新ラインを立ち上げる。バスバーの売上高を26年度に60億円以上達成を目指している。バスバーはEV以外にも充電器や風力発電などにも使用される。当社のバスバーは、独自の塑性加工技術を生かして長尺の複雑な曲げ加工を得意としている。抵抗器を組み合わせたシャントバスバーなども合わせ、販売を拡大していきたい」

――SDGsにも関連する竹炭サステナブル事業も進めている。

「10年ほど前から京都府宮津市の放置竹林の竹害から救うため、同事業を開始した。環境に優しい製法で作った竹炭は自動車のインパネ用やスマートフォン部品のインクとして使用されている。今年からは一般消費者向けに自社ブランド『京かぐや炭』を展開し、当社と同じ地元京都企業とのコラボで、ノートや花器、お香、小皿を販売した。今後はネット販売も検討している」

――人材育成は。

「採用につなげるため、2年ほど前から広報活動に注力している。学生の目に留まり、アピールできるよう、プレスリリースの発信など積極的に取り組んでいる。また、社内のコミュニケーションを活性化させるため、『言える化活動』を実施している。役職、年齢にかかわらず本音で話し合える雰囲気を作ることが目的で、グループ討論なども行う。『明るく・楽しく・元気よく』を心がけ、前向きな気持ちで仕事に取り組んでほしい」

（篠原　沙綾）